

Title	「グラールって誰?」：リヒャルト・ワーグナーの『パルジファル』と『ローエングリン』に見るグラールの人格化
Sub Title	„Wer ist der Gral?“ Vermenschlichung des Grals in Richard Wagners Parsifal und Lohengrin
Author	吉田, 真(Yoshida, Makoto)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2023
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. ドイツ語学・文学 (Hiyoshi-Studien zur Germanistik). No.64 (2023. ) ,p.45- 62
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032372-20231031-0045">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032372-20231031-0045</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 「グラールって誰？」 ——リヒャルト・ワーグナーの『パルジファル』と 『ローエングリン』に見るグラールの人格化——

吉 田 真

## 1. 「グラール」についての問い

最初に、リヒャルト・ワーグナー（1813～1883年）の最後の楽劇、舞台神聖祝祭劇『パルジファル』（1877年）の第1幕、聖盃城に向かう壮大な場面転換の直前の場面から、老騎士グルネマンツと少年パルジファルの対話を引用する（和訳、太字は引用者）<sup>1)</sup>。

GURNEMANZ

Vom Bade kehrt der König heim;

hoch steht die Sonne:

nun laß zum frommen Mahle mich dich

geleiten;

denn bist du rein,

wird nun **der Gral** dich tränken und speisen.

PARSIFAL

Wer ist **der Gral**?

水浴から王様がお帰りだ。

陽も高く昇った。

今からおまえを聖餐の席に案内しよう。

おまえが汚れなき者なら、

グラールが飲み物や食べ物をお恵み下さるだろう。

グラールって誰？

---

1) Richard Wagner: Dichtungen und Schriften. Jubiläumsausgabe in 10 Bänden. Hrsg. von Dieter Borchmeyer. Frankfurt a. M. (Insel) 1983 [以下、JAと略記], Bd. 4, S. 295.

## GURNEMANZ

Das sagt sich nicht;  
doch bist du selbst zu **ihm** erkoren, bleibt dir  
die Kunde unverloren.

Und sieh! –

Mich dünkt, daß ich dich recht erkannt:  
kein Weg führt zu **ihm** durch das Land, und  
niemand könnte ihn beschreiten,  
den **er** nicht selber möcht geleiten.

## PARSIFAL

Ich schreite kaum, –  
doch wähn' ich mich schon weit.

## GURNEMANZ

Du siehst, mein Sohn,  
zum Raum wird hier die Zeit.

口では言えないな。

だが、グラールに選ばれた身なら、  
そのお告げが分かるはず。

さあ、見よ！

おまえが誰だか私には分かった気がする。  
そこへ通じる道は国中のどこにもなく、  
誰も歩み寄ることはできない。

御みずからのお導きがあるだけなのだ。

ほとんど歩いてないのに、  
もう遠くに来た気がする。

そのとおり、我が息子よ、  
ここでは時間が空間になるのだ。

自分の名も出自も知らない愚かな少年パルジファルは、グルネマンツから初めて聞いた「グラール」という言葉を人名と思い、「グラールって誰？」と問う。しかし、その直前のグルネマンツは「グラールが飲み物や食べ物をお恵み下さるだろう」と言っているのだから、**der Gral**と定冠詞が付いているとはいえ、パルジファルがグラールを人間だと思っても無理はない。ところが、意外にもグルネマンツはこれを訂正することなく、「それは口では言えない」と答える。そして、続く台詞に現れるグラールを指す四つの人称代名詞 **ihm, ihm, ihn, er** はいずれも「人」を指しているような表現で使われ、特に最後の **er** は「グラール御みずからのお導きがなければ」の主語であるから決定的である。つまり聖盃城の掟に最も精通した騎士グルネマンツが、そもそもグラールを人格化していると見てよいだろう。

## 2. ヴォルフラムの『パルツィヴァル』との相違

ここでワーグナーの『パルジファル』の原作とも言えるヴォルフラム・

フォン・エッセンバッハ（推定 1170～1220 年）による中世の叙事詩『パルツィヴァル』（1210 年頃）における「グラール」に関する描写を抜粋し、ワーグナー版との対比を試みる。

- ・「天文学に通じた異教徒の学者フレゲターニースが星座の中にグラールの秘密とその名を見て、最初にこの物語を書いた。そのグラールは天使によって地上にもたらされた。この地上では汚れなき人がこのグラールを守護している（453～454）」<sup>2)</sup>

この経緯に関して、ワーグナーの『パルジファル』第 1 幕でグルネマンツは以下のように語っている。「神聖にして厳かな夜に、ティトゥレル様の許に救世主の御遣いたちが降り立ち、最後の愛餐で用いられた聖なる器、神聖にして高貴な盃、十字架では聖なる血も受けた盃を、その血を流させた槍と共に、至高の奇蹟の形見として、我らの王の庇護に委ねられた。」<sup>3)</sup> さらに、遙かに先行する歌劇『ローエングリン』において、このくぐりなどは、ほぼそのまま完全に採用されている。「それは至純の人々によって守られるべく、天使たちによって地上にもたらされました」と次節に引用するローエングリンの台詞にある。

- ・「キリスト教徒のキオートがこの最初の版をスペインのトレドで発見した。これはアラビア語で書いてあるが、グラールの不思議な力を知るにはキリスト教徒でなければならない。」<sup>4)</sup>

本筋とは離れるが、アラビア語という点では、ワーグナーは Parzival の語源を、アラビア語の parsi（純粋な）と fal（愚者）に由来するという

2) ヴォルフラム・フォン・エッセンバハ（加倉井肅之、伊東泰治、馬場勝弥、小栗友一訳）：パルチヴァール（郁文堂）1974 [以下、ヴォルフラムと略記]、456 頁。なお、引用文中の括弧内の数字は、「原本の詩節番号」（同書 ii 頁）である。

3) JA, Bd. 4, S. 289.

4) ヴォルフラム、456 頁。

ヨーゼフ・ゲレスの説を採用し、主人公の名を Parsifal に改めたという経緯がある。後にジュディット・ゴートイエからその説が学問的に正しくないと知らされたが、ワーグナーはあえて再変更はしなかった<sup>5)</sup>。

そもそも異教徒は聖盃城に近づくことも出来ないのだから、ましてやグラールの不思議な力を知ることなど不可能だと思われる。しかし、ワーグナーは『パルジファル』の作品中、一度も「キリスト」や「イエス」という名を登場させていない（キリストを連想させる人物は「救世主 (der Heiland)」<sup>6)</sup> もしくは「救済者 (der Erlöser)」<sup>7)</sup> と呼ばれる)。したがって「キリスト教」や「キリスト教徒」という言葉も使用されない。伝説の由来からしてキリスト教世界は自明だという見方も可能だが、ワーグナーは『パルジファル』を書き上げる前に、仏教を題材とし、ブッダを主人公とした『勝利者たち (Die Sieger)』という作品の草案を残し、この構想が『パルジファル』にも取り入れられていることから、『パルジファル』をキリスト教に限定された宗教劇にすることを注意深く避けたと考えられる。

・「キオートはグラールを守護している人をアンショウヴェの年代記に見つけた。ティトゥレルの息子フリムテルが聖杯をアンフォルタスに託したと記してある (455)。」<sup>8)</sup>

ワーグナーの『パルジファル』ではアンフォルタスの父フリムテルの登場も言及もなく、アンフォルタス自身がティトゥレルの息子とされている。

・「形ははっきりしない。石、おそらく宝石であろう。名前はグラールともラプジト・エクシルリース (469) とも言う。」<sup>9)</sup>

5) 吉田真：ワーグナー（音楽之友社）2005，149–150 頁および 243 頁参照。

6) JA, Bd. 4, S. 289 u. 314.

7) JA, Bd. 4, S. 314 u. 331.

8) ヴォルフラム，456 頁。

9) ヴォルフラム，456 頁。

ワーグナー版でもグラールの形ははっきりしないが、少なくとも「石」や「宝石」ではない。『パルジファル』においてはグルネマンツの台詞の中で「聖なる器、神聖にして高貴な盃 (das Weihgefäß, die heilig edle Schale)」<sup>10)</sup>と表現され、また、『ローエングリン』においても主人公の台詞の中で「器 (ein Gefäß)」<sup>11)</sup>との言及がある。さらに『パルジファル』のト書きにおいては「古代風の水晶の盃 (eine antike Krystalschale)」<sup>12)</sup>という具体的な注記があり、多くの伝統的な舞台演出ではこのイメージが継承されている。「ラプジト・エクシルリース」という名称は採用されず、もっぱら *der Gral* と呼ばれている。

- ・「グラールは不誠実な人間には重くて持ち上がらない。異教徒には目の前にあっても見えない (810, 813)。その城は見る定めの人にしか見つからない (250)。」<sup>13)</sup>

グラールの重量、異教徒の不可視についてワーグナー版では言及がない。ただし、先に引用したグルネマンツの「そこ (グラール) へ通じる道は国中のどこにもなく、誰も歩み寄ることはできない。御みずからのお導きがあるだけなのだ」という台詞は、「城が見る定めの人にしか見つからない」という記述に符合するものだろう。グルネマンツは、その前にも「罪びとには見出しえない道を辿って (auf Pfaden, die kein Sünder findet)」<sup>14)</sup>と語っている。

- ・「グラールは望むだけの飲食物を提供する (382)。」<sup>15)</sup>

これは先に引用したグルネマンツの「グラールが飲み物や食べ物をお恵

10) JA, Bd. 4, S. 289.

11) JA, Bd. 2, S. 194.

12) JA, Bd. 4, S. 299.

13) ヴォルフラム, 456 頁。

14) JA, Bd. 4, S. 289.

15) ヴォルフラム, 457 頁。

み下さるだろう」という台詞に明らかである。

・「グラールを見ると人は若さを保つことができ、病気の者は1週間死ぬことができない(469)。」<sup>16)</sup>

前段については、次節で引用する『ローエン格林』の主人公の台詞に「そこに目を向けると死の闇も逃げてゆきます」<sup>17)</sup>とあり、次節で検討するように「そこ」が「グラール」を指すと解釈すれば、「若さを保つことができ、病気の者は1週間死ぬことができない」というヴォルフラムの記述にほぼ符合する（「1週間」という限定は別としても）。

重傷を負って絶えず苦しみに苛まれているアンフォルトスが死ぬことができないのは、このグラールの恵みのためだろう。しかし、アンフォルトスは悔悟と苦痛のあまり死を望んでいるので、愛餐の儀式においてグラールの開帳を拒否するのである。ティトゥレルの「グラールを開帳せよ！(Enthüllet den Gral!)」<sup>18)</sup>という命令に、アンフォルトスは「いや、開いてはならぬ！(Nein! Laß ihn unenthüllt!)」<sup>19)</sup>と叫び、やがて「聖なる器に宿る神性が、力強く熱を帯びてくる。それを有難く享受する苦痛に身を貫かれ、聖なる血の泉が、この胸に注がれるのを感じる(des Weihgefäßes göttlicher Gehalt / erglüht mit leuchtender Gewalt;- / durchzückt von seligsten Genusses Schmerz, / des heiligsten Blutes Quell / fühl' ich sich gießen in mein Herz)」<sup>20)</sup>と苦痛を訴える。死ぬことが出来ないことが、むしろ懲罰であるのはワーグナーの歌劇『さまよえるオランダ人』の主人公にも共通する宿命である。

16) ヴォルフラム, 457頁。

17) JA, Bd. 2, S. 194.

18) JA, Bd. 4, S. 297.

19) JA, Bd. 4, S. 297.

20) JA, Bd. 4, S. 298.

- ・「不死鳥フェニックスはグラールの力によって、燃えてまたその灰からよみがえり一層美しくなる (469)。」<sup>21)</sup>

ワグナーの作品ではフェニックスへの言及はない。

- ・「グラールに文字が現れて、グラールに召命された者の名前などの特別の告知をする。」<sup>22)</sup>

ワグナーの『パルジファル』第1幕で、グルネマンツの語るところによると、「共に苦しみ知を得る、汚れを知らぬ愚か者、その男を待て、わが選びし者を (durch Mitleid wissend / der reine Tor, / harre sein', / den ich erkor.)」<sup>23)</sup> という託宣は、アンフォルタスが耳にしたのではなく、「はっきりと読み取れる文字の印によって (durch hell erschauter Wortezeichen Male)」<sup>24)</sup> 伝えられたという。

- ・「この不思議な力は、キリスト受難の聖金曜日ごとに1羽の白い鳩が持ってくるホスチアによって与えられる (469)。」<sup>25)</sup>

次節で引用する『ローエングリン』の主人公の台詞に「年毎に天から1羽の鳩が舞い降りて、その奇蹟の力を新たに強めるのです」<sup>26)</sup> とある。ここに聖金曜日の言及はないものの、聖金曜日に設定されている『パルジファル』の最終場面では、ト書きに「丸天井から1羽の白い鳩が舞い降りてきて、パルジファルの頭上高くに静止する」<sup>27)</sup> とある。

- ・「グラールは、三十マイル四方人家も畑もない森の中の城、ムンサルヴ

---

21) ヴォルフラム, 457頁。

22) ヴォルフラム, 457頁。

23) JA, Bd. 4, S. 290.

24) JA, Bd. 4, S. 290.

25) ヴォルフラム, 457頁。

26) JA, Bd. 2, S. 194.

27) JA, Bd. 4, S. 331.

エーシェ、いわゆる聖杯城の寺院（あるいは礼拝堂か）に安置されていて、洗礼のとき（816）、祝宴のとき用いられる（807）。この時グラールを捧持するのは、アンフォルタスの妹（パルチヴァールの叔母）「レパンセ・デ・ショイエである。」<sup>28)</sup>

ワグナーの『パルジファル』第1幕冒頭のト書きに「森。影に富み厳肅だが陰鬱ではない。岩だけの地面。中央に空き地、左手の坂を上ってゆくと聖盃城に通じる道があるように見える」<sup>29)</sup>とあり、この描写に即している。聖盃城の名称は、次節で引用する『ローエングリン』の主人公によって「モンサルヴァート (Monsalvat)」と紹介され、「その中に光り輝く寺院がある」とされる。『パルジファル』第1幕において、そこで行なわれるのは「洗礼」でも「祝宴」でもなく「愛餐 (Liebesmahl)」の儀式である。

ワグナー版ではアンフォルタスの妹は登場も言及もない。愛餐の儀式では聖盃騎士たちの他は若者たちと少年たちの声が聴こえるだけで、女性の存在はないが（幕切れで聴こえてくる「アルト独唱」は、その場にいる「女性」の声ではないだろう）、そこが必ずしも女人禁制でないことは、第3幕で悔い改めたクンドリーがパルジファルとグルネマンツに導かれて聖盃城に入ることで明らかになる。

・「天使に守られていたが、のち神に選ばれた家系（ティトゥレルの家系）に守護されるようになった（454, 471）。」<sup>30)</sup>

ワグナーの『パルジファル』第1幕でグルネマンツは以下のように語っている。「神聖にして厳かな夜に、ティトゥレル様の許に救世主の御遣いたちが降り立ち、最後の愛餐で用いられた聖なる器、神聖にして高貴な盃、十字架では聖なる血も受けた盃を、その血を流させた槍と共に、至

28) ヴォルフラム、457頁。

29) JA, Bd. 4, S. 283.

30) ヴォルフラム、457頁。

高の奇蹟の形見として、我らの王の庇護に委ねられた。これらの聖なる遺物のために王は聖なる城を築かれた。」<sup>31)</sup> こうしてティトゥレルは聖盃城の城主となったのである。

- ・「このグラールの騎士はテンプレイゼと呼ばれ、鳩の紋章をつけ（474）、侵入者を見つけると相手の命を奪うまで戦う（492）。」<sup>32)</sup>

ワグナーの『パルジファル』第1幕冒頭のト書きに、聖盃騎士と小姓の衣裳について「テンプル騎士団の制服に似て白の軍服とマント。ただし、赤い十字の代わりに飛んでいる鳩がワッペンとマントに刺繍してある」<sup>33)</sup>と記している。ただし、「テンプレイゼ」という名称は登場しない。

聖盃城への侵入者と実際に戦う場面は『パルジファル』にも『ローエン格林』にもないが、『ローエン格林』の第3幕で、新婚の寝室に闖入してきたフリードリヒ・フォン・テルラムントをローエン格林が一刀のもとに切り捨てる場面は、この掟を想起させる。

- ・「グラールに仕える者は、現世ではグラールによって養われ（469）、死後は永遠の浄福が約束されている。」<sup>34)</sup>

現世については先に引用した「グラールが飲み物や食べ物をお恵み下さる」というグルネマンツの台詞にあるとおり。死後の「永遠の浄福」については直接の言及はないが、『パルジファル』第3幕の幕切れで一同が歌う「救済者に救済を！（Erlösung dem Erlöser!）」<sup>35)</sup>という意味深長な言葉の解釈の有力な手掛かりになると思われる。

---

31) JA, Bd. 4, S. 289.

32) ヴォルフラム, 457 頁。

33) Richard Wagner: Parsifal. Hrsg. von Egon Voss. Stuttgart (Reclam) 2005, S. 5.

34) ヴォルフラム, 457 頁。

35) JA, Bd. 4, S. 331.

・「グラール守護の役を受け持つ者は、謙虚と純潔が要求される。しかし一生純潔のままグラールのもとで過ごすのではない。主なき国に領主として送られると（例えばローエングリーン）、そこでは結婚が許される。乙女もグラールの城以外では結婚できる（494）。しかしグラール王だけはグラールに仕えながら、グラールに告げられた女性との結婚が許される（478, 495）。」<sup>36)</sup>

「純潔」については、ワーグナーの『バルジファル』第1幕で次のようなグルネマンツの言及がある。「知ってのとおり、純潔な者だけに、神聖な救済の仕事に就く共同体への参加が許される」<sup>37)</sup>。

ここでローエングリーンが引き合いに出されているとおり、ヴォルフラムの『パルツィヴァル』においても、ワーグナーの『ローエン格林』においても、ブラバント公国に遣わされたローエングリーン（ロヘラングリーン）は当地で公女エルザと結婚する。ワーグナー版では結婚した翌日にローエングリーンはブラバント公国を去ってしまうが、ヴォルフラム版では少なくとも二人の子供が生まれるまで長期滞在している。ワーグナー版のローエングリーンも最後に自分の父がパルツィヴァルであると明かし、母親は不明ながら、聖盃王に息子がいることを自ら証明している。

以上に検討したように、ワーグナーの『バルジファル』は、ヴォルフラムの『パルツィヴァル』を独自の思想と解釈で換骨奪胎した作品でありながら、こと「グラール」に関しては、形状こそ異なれ、原作の設定とイメージを尊重し、踏襲しつつ、その「人格化」をさらに強調していることが見て取れるだろう。

ところで、ワーグナーには『バルジファル』に先立つこと30年以上も前に完成した歌劇『ローエン格林』があり、そこでは誰からも「グラールって誰？」などと問われることなく、聖盃城の騎士が自ら「グラール」

36) ヴォルフラム, 457頁。

37) JA, Bd. 4, S. 289.

の何たるかについて語ってくれている。そこで、次に『ローエン格林』における「グラール」について見てみることにしよう。

### 3. 『ローエン格林』の場合

ワーグナーの歌劇『ローエン格林』（1845年）においては、ドラマの大詰めになってから初めて白鳥の騎士が自らの正体を明かすので、当然のことながら、それ以前にグラールについての言及は一度もない。したがって、以下に引用する第3幕第3場の「グラールの物語」<sup>38)</sup>において初めてGralという言葉が登場する（和訳、太字は引用者）。

#### LOHENGRIN

In fernem Land, unnahbar euren Schritten,  
liegt eine Burg, die Monsalvat genannt;  
ein lichter Tempel stehet dort inmitten,  
so kostbar, als auf Erden nichts bekannt;  
drin **ein Gefäß** von wundertät' gem Segen  
wird dort **als höchstes Heiligtum** bewacht:  
es ward, daß **sein** der Menschen reinste pflegen,  
herab von einer Engelschar gebracht;

alljährlich naht vom Himmel eine Taube,  
um neu zu stärken **seine** Wunderkraft:  
es heißt **der Gral**, und selig reinster Glaube  
erteilt durch **ihn** sich seiner Ritterschaft.  
Wer nun **dem Gral** zu dienen ist erkoren,

皆様が近づくことのできない遠い国に  
モンサルヴァートという城があります。  
その中に光り輝く寺院があり、  
この世では知られていない貴いものです。  
その中には奇蹟を恵む**器**があり、  
**至高の聖遺物**として安置されています。  
それは至純の人々によって守られるべく、  
天使たちによって地上にもたらされました。  
年毎に天から1羽の鳩が舞い降りて、  
その奇蹟の力を新たに強めるのです  
その名は**グラール**といい、至純の信仰が  
有難くも騎士団にもたらされます。  
グラールに仕えるべく選ばれた者は、

38) JA, Bd. 2, S. 194f. ただし、引用文中15行目の冒頭 **an dem** が当版では **an ihm** となっているが、実際に歌われる歌詞に即して次の Schott 版全集に従い、**an dem** を採用した。なお、この異同によって解釈の変更は生じないものと考ええる。Richard Wagner: Sämtliche Werke. Bd.7 Lohengrin: romantische Oper in drei Akten WWV 75. Hrsg. von John Deathridge u. Klaus Döge. Mainz (Schott) 1996-2000, Dritter Akt, S.142.

*den* rüstet *er* mit überirdischer Macht;  
an *dem* ist jedes Bösen Trug verloren,  
wenn *ihn er* sieht, weicht dem des Todes Nacht.

Selbst wer von *ihm* in ferne Land' entsendet,  
zum Streiter für der Tugend Recht ernannt,  
dem wird nicht seine heil'ge Kraft entwendet,  
bleibt als *sein* Ritter dort er unerkant.

So hehrer Art doch ist *des Grales* Segen,  
enthüllt – muß er des Laien Auge fliehn;

des Ritters drum sollt Zweifel ihr nicht hegen,  
erkennt ihr ihn, dann muß er von euch ziehn.

Nun hört, wie ich verbot'ner Frage lohne!

**Vom Gral** ward ich zu euch daher gesandt:

mein Vater Parzival trägt *seine* Krone,  
*sein* Ritter ich – bin Lohengrin genannt.

天上の力によって武装されます。  
その前にはいかなる悪の企みも消え失せ、  
そこに目を向けると死の闇も逃げてゆき  
ます。

そこから遠い国に遣わされ、  
有徳の戦士に選ばれた者でさえ、  
聖なる力が奪われないのは、  
その騎士として素性が知られないうちの  
のです。

いかに気高いグラールの恵みであっても、  
正体が知れると、衆人の目を逃れなけれ  
ばなりません。

ですから皆様は騎士に疑いを抱いてはな  
らないのです。

皆様に知られると、騎士は去らなければ  
なりません。

さあお聞きください、禁じられた問いの  
答えを！

私はグラールによってこの地に遣わされ  
た者。

父のバルツイヴァルがその王冠を戴き、  
その騎士たる私は、ローエン格林と申  
します。

ここで検討すべきは、以上に採録した詩文の13行目から16行目にお  
いて、順に *den*, *er*, *dem*, *ihn*, *er*, *dem* とある指示代名詞と人称代名詞  
の解釈である。いずれも男性名詞を受ける代名詞であるため、ドイツ語母  
語話者にとっては、かえって問題が顕在化しにくいことが推測されるが、  
日本語と英語では、人 (Ritter) か物 (Gral) で区別して訳す必要がある  
ので、翻訳された場合、その解釈の違いが明確に表れる。そこで検討材料  
として、以下に3種の和訳と3種の英訳を引用する (太字は引用者)。

【原文】

Wer nun dem Gral zu dienen ist erkoren,  
den rüstet er mit überirdischer Macht;  
an dem ist jedes Bösen Trug verloren,  
wenn ihn er sieht, weicht dem des Todes Nacht.

【和訳 A】<sup>39)</sup>

このグラール杯に、奉仕するようにえられた者は、  
杯の靈験によって、神通力をさずけられるので、  
どんな邪悪な者のたくらみも、その騎士には刃向かいえず、  
騎士がグラールの杯を奉拝すれば、暗い死の影さえ逃げていきます。

【和訳 B】<sup>40)</sup>

グラールに仕えるべく選ばれた者は  
この世ならぬ力をその身に授かる—  
グラールの前には、いかなる悪のまやかしも潰え  
ひとたびグラールを仰げば、死の闇さえ退く。

【和訳 C】<sup>41)</sup>

このグラールに仕える騎士に選ばれた者には

- 
- 39) リヒャルト・ワーグナー（高木卓訳）：ローエングリン（音楽之友社）1970, 147頁。高木訳には先行する岩波文庫版（岩波書店）1953があり、一部の訳語、漢字かな表記に異同があるが、基本的な解釈に違いはない。
- 40) リヒャルト・ワーグナー（日本ワーグナー協会監修、三宅幸夫、池上純一編訳）：ローエングリン（五柳書院）2010, 101頁。
- 41) リヒャルト・ワーグナー（高辻知義訳）：ローエングリン（音楽之友社）2011, 116頁。なお、高辻訳にはCD（WPCC-5370, Teldec Classics International GMBH. Japan. 1993）解説書に収録された旧訳があり、「彼がいちど眼差しを注げば、死の闇も彼を避ける」の文は「死神すらその姿を

天上の力によって武装が施される。

この騎士にはいかなる悪の計略も勝てず、彼がいちど眼差しを注げば、死の闇も彼を避ける。

【英訳 D】<sup>42)</sup>

**He** who is chosen to serve the Grail  
is armed with supernatural power;  
the tricks of evil men are useless against **him**,  
at sight of **him** the shadow of death give way.

【英訳 E】<sup>43)</sup>

**Whoever** is chosen to serve the Grail  
is armed by **it** with heavenly power;  
the darts of evil prove powerless against **him**,  
once **he** has seen **it**, the shadow of death flees **him**.

【英訳 F】<sup>44)</sup>

**He** who is chosen to serve the Grail  
it arms with supernatural might;  
against **him**, all evil deceit is vain,  
before **him** even the darkness of death yields.

---

見ると退き避ける」となっていて、英訳 D と同じ解釈を採っていた。

42) Richard Wagner: Lohengrin. English translation. (EMI Records Ltd) 1964.

43) Richard Wagner: Lohengrin. translated by Chris Wood. (The Decca Record Company) 1987.

44) Richard Wagner: Lohengrin. Translated by Lionel Salter. (Teldec Classics International, GMBH) 1998.

以上の翻訳の解釈の違いを端的に示すため、それぞれの代名詞がどの名詞を指しているかを以下の表にまとめる。ここに Ritter (騎士) の語は使われていないが、Wer nun dem Gral zu dienen ist erkoren (グラールに仕えるべく選ばれた者) を便宜的に Ritter と表記する。なお、括弧内は訳語として明記されていないが、そのように解釈できる単語を挙げた。ダッシュは訳語に反映されていないものである。

	den	er	dem	ihn	er	dem
和訳 A	Ritter	Gral	Ritter	Gral	Ritter	(Ritter)
和訳 B	Ritter	(Gral)	Gral	Gral	Ritter	(Ritter)
和訳 C	Ritter	(Gral)	Ritter	(Tod)	Ritter	Ritter
英訳 D	Ritter	(Gral)	Ritter	Ritter	(Tod)	(Ritter)
英訳 E	Ritter	Gral	Ritter	Gral	Ritter	Ritter
英訳 F	Ritter	Gral	Ritter	—	—	Ritter

2行目の den と er については議論の余地はないが、解釈の前提として挙げたものである。ただし、ここに挙げたすべての和訳と英訳が受動態で訳しているのに対し、ドイツ語原文は能動態である、直接目的語の den が「騎士」、主語の er が「グラール」であることから、「グラールが騎士に武装を施す」という「グラールの人格化」が表現されていることは、ここで指摘しておくべきだろう。

3行目の dem については、【和訳 B】のみが Gral と解釈しており、他はすべて Ritter となっている。すなわち、「悪の企み」が「グラールによって消え失せる」のか、「グラールの力によって武装した騎士に敗れる」のか、という違いだが、意味において対立する解釈とまでは言えないことから、ここはむしろ、an dem 以下の文体上の問題の方が解釈の手掛かりとして大きいと思われる。筆者は、次の4行目の文体と照らし合わせて、ワーグナーは指示代名詞を直前の人称代名詞を受けるように書いていると判断し、この an dem は2行目の er、すなわち「グラール」を指すという

少数派の解釈を支持したい。

4行目の *ihn*, *er*, *dem* は、すべて関連してくるが、ここでは前節でも引用したヴォルフラム・フォン・エッシェンバッハ『パルツイヴァル』の中の記述、「グラールを見ると人は若さを保つことができ、病気の者は1週間死ぬことができない。」が、大きな手掛かりとなる。すなわち、*ihn* が *Gral* で、*er* が *Ritter* と解釈すると、「騎士がグラールを見ると」となり、ヴォルフラムの原典の描写にも合致する。最後の *dem* は *Ritter* を指すことで、すべての和訳、英訳が一致しているが、そうであれば、この指示代名詞 *dem* は直前の人称代名詞 *er* を受けることになり、この文体は3行目について述べた解釈を裏付ける結果となる。ワーグナーが、ここであえて *er ihn* という主語、目的語の順ではなく、*ihn er* と逆の順に書いた理由も、これで説明がつかだろう（いずれも *Jambus* の文体に矛盾しない）。

加えて、これは韻文詩であり、しかもオペラ台本であることから、文章を段落ごとに目で追うのではなく、語句を順番に耳で聴くように理解することが肝要となる。すると、2行目以降を、*den* (*Ritter*) → *er* (*Gral*) → *an dem* (*Gral*) → *ihn* (*Gral*) → *er* (*Ritter*) → *dem* (*Ritter*) という流れで解釈する方が自然に意味を理解できるのではないか。結論として筆者は全体として【和訳 B】の解釈に賛同する。

以上に引用したローエングリンの「グラールの物語」には、ワーグナーが作曲まで完成していながら、1850年、ヴァイマル国民劇場における初演の直前になって、指揮者のフランツ・リストに宛て削除を指示した第2節が存在する。この部分は現在に至るまで実際の上演で採用されることは極めて稀だが、「グラール的人格化」という観点からは欠かせない言及を含んでいるので以下に引用する（和訳、太字は引用者）<sup>45)</sup>。

---

45) JA, Bd. 2, S. 199.

## LOHENGRIN

Nun höret noch, wie ich zu euch gekommen!

Ein klagend Tönen trug die Luft daher,  
daraus im Tempel wir sogleich vernommen,  
daß fern wo eine Magd in Drangsal wär';  
als wir **dem Gral zu fragen** nun  
beschickten,

wohin ein Ritter zu entsenden sei,  
da auf der Flut wir einen Schwan  
erblickten,

zu uns zog einen Nachen er herbei:  
mein Vater, der erkannt' des Schwanes  
Wesen,

nahm ihn in Dienste nach **des Grales  
Spruch:**

denn wer ein Jahr nur seinem Dienst  
erlesen,  
dem weicht von dann ab jedes Zaubers  
Fluch.

Zunächst nun sollt' er mich dahin geleiten,  
woher zu uns der Hilfe Rufen kam;  
denn **durch den Gral** war ich erwählt zu  
streiten,

darum ich mutig **von ihm Abschied nahm.**  
Durch Flüsse und durch wilde  
Meereswogen,

hat mich der treue Schwan dem Ziel genaht.  
bis er zu euch daher ans Ufer mich gezogen,  
wo ihr in Gott mich alle landen saht.

さて、続けてお聞きください！

いかにして私が皆様の許へ参ったか。  
ある嘆きの声が風が運んで来ました。  
寺院にいた私たちは直ちに知りました。  
彼方でひとりの乙女が窮地にあることを。  
そこでグラールに伺いを立てました、

どこへ騎士を派遣すべきかと、  
すると川の上を一羽の白鳥が、

小舟を曳いてこちらへ来るのが見えました。  
この白鳥の正体を見抜いた私の父は、

グラールの託宣に従いこれに務めを  
託しました。

一年だけでも務めに励めば、

その暁にはどんな魔法の呪いからも  
逃れられるからです。

そこで、まず白鳥は私を連れて、  
助けの呼び声が来たる方へと向かいました。  
グラールによって私は戦士に選ばれたので、

勇気を奮ってグラールに別れを告げました。  
幾多の川や海の荒波を越えて、

忠実な白鳥は私を目的地に運び、  
皆様のいるこの岸へと辿り着いたのです。  
神のご加護のもと、私が入陸したのは  
皆々様をご覧になられたとおり。

以上に太字で示した部分、「グラールに伺いを立てました」と「グラールの託宣」は明らかに「グラール的人格化」を示しており、「グラールによって選ばれた」と「グラールに別れを告げました」も、それに準じ、少

なくとも擬人化された表現であると言える。

ローエン格林はエルザとの別れに際して最後に「これ以上留まっていたは、グラールの怒りを買ってしまう (Mir zürnt der Gral, wenn ich noch bleib'!.!)」<sup>46)</sup> という言葉を発する。これこそは「グラールの人格化」による発言に他ならない。

このように「グラールの人格化」はワーグナーの『ローエン格林』から『パルジファル』に完全に引き継がれている。さらには、オペラの序曲に相当する、両作品の第1幕への前奏曲では、それぞれ「聖盃の動機」が主要旋律となって構成され、いずれもドラマの要所要所で、重点的かつ効果的に用いられ、格別の大きな印象を残す。その意味で、この成立年代の離れた両作品は「グラール二部作」と称することが出来るだろう。

---

46) JA, Bd. 2, S. 197.